夢物語≪ドリームワールド≫

西原雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢物語≪ドリームワールド≫

【Ｎコード】
Ｎ８５１６Ｘ

【作者名】
西原雛

【あらすじ】
２人で愚者討伐を行ってきた廉と瑞希。
ある日討伐依頼を受けて訪れた森で小さな、でも立派な屋敷を見つけた。
それが、すべてのはじまりとなった。

『普通の日常』が終わった日

「廉、瑞希・・・お前らは、立派な賢者に・・・・！」

今でも鮮明に残る、〝あの男〟の言葉。
あれから、１０年も経つというのに――

「おい廉！聞いてるか！？」
「わっ！？」

ハッとした。
俺、神奈川廉は親友であり〝仲間〟であるこの男・相模瑞希の怒号で自分がボーっとしていたことに気が付いた。

「ご、ごめんごめん！ボーっとしてた！」
「ったくお前・・・俺が今回の依頼内容説明してやってんのに・・・」

チッと舌打ちが聞こえそうなくらいイラついている。
サラサラの黒髪に整った容姿。紺色の上質なコートから落ち着いた雰囲気が滲み出ている。
それなのに見た目の割に短気なこいつのことだから、いつものことなのだが。

「・・・でだ。今日見た感じで一番報奨金が高くて俺たちでもできそうな依頼が、これだ。」

瑞希は俺に携帯を突き付けてきた。

この時代、子供でも老人でも、携帯を持つことが当たり前で、１人２台、３台と持つ奴もいるくらい。
携帯は、各々の通信手段はもちろんのこと、あらゆる情報源、そして財布としての役割も果たしている。
更に今の科学技術のおかげで「充電」も必要が無い・・・と、母さんが言っていた。
俺たちはその「充電」っていうのはしたことないけど。

瑞希の携帯画面を覗きこむと、そこには場所、依頼内容、報奨金が事細かに記載されている。

「場所：英葉山≪えいばやま≫頂上近辺」

英葉山といえば、俺たちが今いる市ヶ原≪いちがはら≫町からもよく見えるくらい近い。
・・・まぁ、頂上まで登るのはちょっと大変だろうけど。

「内容：頂上で最近目撃された愚者の討伐。
愚者の数、およそ３体。すべて中型との情報。」

愚者、つまり化け物みたいなものは３体。しかも中型だから俺たち２人がかりなら大丈夫だろう。

「報奨金：３０万リフ」

リフとは、世界共通の通貨。愚者討伐は世界問題で、どの国でも報

奨金制度は同じ。
だからこの討伐制度ができたときに報奨金を統一化するためにも、まずは同意した世界の９割ほどの国が通貨単位を統一した、と昔学校で習った。

「ふーん・・・これなら楽そうだよね。じゃあ今日はこれ受諾しよっか。」
「ああ。よし！これ受諾するぞ。」

そう言って瑞希は携帯画面に何かを打ち込んでいる。
おそらく『受諾届』のメール文を打ち込んでいるんだろう。
これを送信することで、この依頼は俺たちのものになるのだ。

「じゃ、行くか。」

携帯をパタン、と閉じると席を立った。

そう、ここまでは、普通だったんだ。

山の上には『討伐の天才』がいた

俺たちがいたカフェ『ギルド』からでて、歩いて約２０分。
俺たちは英葉山の麓に着いた。
あと普通に歩いて３０分程度でこの山の頂上に着くだろう。
「結構遠いよね・・・ロープ―ウェイとかあればいいのに。」
俺はため息をついて行った。
「仕方ないだろ？この山には歴史的にも重要な樹木や遺跡だってあるんだ。
そう簡単にロープ―ウェイ業者が介入できるわけないだろ。」
バッサリ瑞希に切られた。
たしかにこの英葉山には、樹齢何万年（詳しくは知らないけど）の木がたくさん生えている。
しかも中腹には古来この土地に住んでいた人間が暮らしていた住居跡が点在している。
研究は進んでいるらしいけど、いまだ謎が多い山。
たしかに、愚者の巣窟になっていても不思議じゃない。
「ほら、行くぞ。
パパッと終わらせて報酬もらおうぜ。」

「・・・そうだな。」

俺は半ば瑞希に引っ張られるように山に入った。

少女と交渉

「この山に住んでいるただの女の子だよ」

「…」

「……」

「…どうしたの？」

沈黙を破ったのは少女。

その間抜けな少女の声に、瑞希の何かが外れた。

「…嘘つけ！！ただの女はそんな変な和服着てねーし山にも住んでねーし、ましてや銃であんな熊倒せるワケねーだろ！！」

「瑞希がキレた…

今日の瑞希は喜怒哀楽激しいなぁ」

最も、出しているのは主に怒の部分だけだけど。

「はぁっ！？

私は生まれてから今までずーっとこうやって暮らしてきたんだよ！？

これが当たり前の生活なんだから！」

少女も瑞希に負けない短気な性格みたいだった。

でも、そんな分析よりも俺は少女の言葉に耳を疑った。

「…まって！
じゃぁ、この愚者の巣窟でずっとこの山でそうやって
愚者倒しながら暮らしてきたっていうの！？」

「そうだよっ！！」

「嘘だろ…！？」

バーン！！という効果音が付きそうな堂々とした面持ち。
瑞希も言い争いを止めて彼女を驚きの眼差しで見つめている。

「…何？」

「お前、誰かと一緒に暮らしてんのか？」

「…今は1人。山の頂上の方にある家で暮らしてる。」

「…今は？」

「2年前、一緒に暮らしてたナズナおばさんはどこかに行ったまま
帰ってこないから。」

さっきまでの怒り顔とは違う、心底悲しそうな顔。

なんか、そんな少女を見ていると、なんとかしてあげたくなった。

「…ねぇ、君の名前は？」
「えっ！？」
唐突な俺の質問に、少女は目を見開いた。

「大城、桃李。
だけど、それがどうしたの？」

「よし！桃李、そのナズナおばさん、俺たちと一緒に今から探しに行こう！」

「「はあぁぁぁっ！！？」」
桃李と瑞希の声が重なる。

「おい廉！！何勝手に言い出してんだよ！」
「だってこの子このままじゃ可哀想だし…」
「そういう問題じゃなくてだな…！」

俺と瑞希が桃李に聞こえないようにコソコソと話していると、唐突に桃李が口を開いた。

「本当に…探してくれるの？」

それは、弱弱しい、だけど真剣さが含まれた声色で。
俺たちは思わずその言い争いをやめて彼女の顔をじっと見てしまう。

「また…ナズナおばさんに逢えるの？」

今にも泣きだしそうな顔。

「…あーもう！調子狂うな…。
とりあえず事情は聞かせろ。探すかどうかはそれからだ！」
面倒くさそうにそうに瑞希は言った。
その言葉に、俺は安堵の笑みを浮かべる。
「わかった…ありがと！」
桃李は、今までの表情の中で一番優しい笑顔を見せた。

BCL

俺たちが桃李に連れられたのは頂上に近い場所にある古びた屋敷。屋敷自体は古いけど、西洋造りで立派な趣はある。

「でけぇ屋敷だな。」
「ここに2人で住んでたの？」
「そう。…そういえば、2人の名前は？」
「ああ、忘れてた。俺は神奈川廉。」
「花形瑞希だ。」

ギィィ、と重そうな扉を開ける。

「私は物心つく前からここに住んでたの。
ナズナおばさんに聞いたんだけど、この山はもともとナズナおばさんの家系の私有地で、
昔は人もいっぱい住んでたの。
でもその家計がナズナおばさんで途絶えて、今残ってんのはこの山の所有権だけ。
だからこの山で私たちはさっきみたいに熊とかを狩ったり木の実や野草を採取して暮らしてきた。」

長い廊下を歩きながら桃李は言った。

「…えらい原始的だな。」

「そうでもないよ。たまに山から下りて買い物だってするし、携帯も持ってる。」

そう言って着物の袖からピンク色の携帯を見せた。
機種は新しいほうで、可愛らしいウサギのストラップもついている。
「本当だ…でも、携帯持ってるならナズナおばさんとも連絡取れるんじゃない？」
「そんなのとっくの昔に電話もメールもしたよ。
帰って来ないからこんな状態なの。」
「そっか…。」
ギィ、とまた重そうな扉を開ける。
中は昔の応接間のようで、高級そうなソファや備え付けの暖炉、
その他級そうな調度品が並んでいる。
広さはだいたい３０畳ぐらいだろうか。
「…にしても、こんな洋風の家に和服はにあわねぇな…」
桃李の服装を見て瑞希が言った。
「うっさい。これはおばさんの趣味なの。」
「で、桃李。さっきナズナおばさんの家系…って言ってたけど、ナズナさんとは親戚関係とか、
血縁者とかじゃないの？」
「ああ…話長くなるから、とりあえず座って。」
俺と瑞希は中央のソファに座った。
部屋の中をゆっくりと歩きながら桃李は言った。

「もともと私、生まれて間もないころ…実の両親に捨てられたんだ。」

「えっ！？」

「それを拾ってくれたのがナズナおばさん。
偶然山から下りたら、道の脇の空き地に捨てられている私を見つけたんだって。
だから私たちに血のつながりは無い。」

「そうだったんだ…」

「そのナズナおばさんがいなくなった経緯は？」

「2年前の冬…いつも通りここで晩御飯を食べて、おばさんは私に言ったんだ。
「今日は夜中相当冷えるみたいだから、早く寝なさい」って。
そういうことは前に何度かあったから、何も疑わずに自分の部屋に行ったの。
私の部屋はこの屋敷のエントランスのちょうど真上で、窓から玄関先がよく見えるんだ。
で、真夜中、偶然目が覚めて、玄関先から物音がすると思って窓の外を見たら、
おばさんが急いで外に走っていくのが見えた。
…なんだろうと思って、私も上着を着て銃を持って外に出たら…
もうそこには誰もいなかった。
それが最後。それから、ずーっとおばさんは帰って来ないし、なんの手がかりもない。」

「…」

2人はその話を聞いて黙り込む。

「今思えば、おばさんには不可解な点がいくつかあった。
例えば、私に聞こえないようにコソコソ誰かと電話してたり、
どうしてもおばさんの部屋には入れてくれなかったり。
私は拾われた身分だから何も言えなかったけど、おばさんがいなくなってから、
おばさんの部屋にはこっそり入ったの。」

「…どうだった？」

ああは言っていたものの、瑞希も真剣に桃李の話を聞いているみたいだ。

「書類の束のファイルがいーっぱい本棚に並んでた。
真ん中の机の引き出しには、コレが入ってた。」

そこで桃李は脇の棚から何かを取り出して俺たちの前のローテーブルに突き出した。
小さな手帳とカードのようだ。

「ＢＣＬ…？」

手帳にもカードにも、そのアルファベット3文字が大きく書かれている。
瑞希はその3文字を訝しげに復唱する。

「ＢＣＬ。これを見つけた時、調べてみた。

ＢＣＬ…「ｂａｔｔｌｅ　ｃｙｂｏｒｇ　ｌａｂｏｌａｔｏｒｙ」、つまり戦闘用人造人間研究所。
ネットで調べてみたんだけど、公式ＨＰも無いから公な組織ではなさそう。
でも、とある掲示板でこんな情報を見つけた。
〝身寄りのない子供を施設に集めて、戦闘に特化する様に改造をしているらしい？…って。」
俺はそれを聞いて１年前に聞いたある噂を思い出した。
「！！…言われてみれば、その組織聞いたことある！
でも１年前…そのＢＣＬは施設自体が何者かに破壊されたって…！」
「何それ！！」
「俺も初めて聞いたぞ、廉。」
「去年、俺久しぶりに母さんのところに戻ったんだ。
そこで、母さんが誰か偉い人とそんな話をしていたのを聞いた。
でもニュース記事には出てなかったから…公には公表できない事件だったんだと思って
誰にも言ってなかったんだけど…」
「…廉のお母さんって何者？」
桃李はサラッとそんなことを言う俺に問う。
「ああ、俺の母さん、国際警察の重役なんだ。
俺はそんな堅苦しいのは嫌だから今は瑞希の家に居候してるんだ

けどね。」

「へぇ…でも、破壊されたって…どういうこと？」

「詳しくは俺も断片的にしかその話を聞いてないから知らないんだけど、

火事とか、薬品が爆発したとか、そんなんじゃなくてなんかこう…

何か恐竜みたいな強大な質量を持った個体が、物理的に施設を壊しまくった…ていう感じ？」

「恐竜って…」

「…とりあえず、その組織について調べてみないとな。」

瑞希は言う。

（お金絡みじゃないのに瑞希が仕事するなんて珍しい…）

「…うん。あ、えっと。

廉、瑞希、よろしくお願いします！

私も戦闘なら協力できるから！」

ペコリと頭を下げる桃李。

「ああ。」

「こちらこそ、よろしく！」

新生活！

「ほら、飯だ。」

所変わって、ここは瑞希の自宅。
ネット環境の充実性や、その他生活環境の良さを考慮して、
ナズナさんの捜索…及びＢＣＬの調査の為に桃李も俺と同様瑞希の
自宅に居候することになった。

もともとファミリー向けのマンションだから１人暮らしには広すぎ
る一室。
俺が瑞希の所に居候することを考慮してこのマンション選んだのだ。
もちろん、家賃はきっちり折半だけど。

初めて見る近代的な造りの家に、きょろきょろと周りを見回す桃李。
そんな桃李に瑞希はトン、と皿を置く。
今日の夕飯はオムライスのようだ。
焦げ目も破れも一切無い美味しそうなオムライス。
それに桃李は目を輝かせた。

「なにコレ！ネット以外で初めて見た…これがオムライスかぁ…美
味しそう！」
「言ってねぇで早く食えよ。」

キッチンからもう２つのオムライスを持った瑞希が呆れた顔で登場
する。
それを俺と瑞希の前に置くと瑞希自身も椅子に座る。

「うん！いただきます！」

パクッと一口口に入れる桃李。
その瞬間、表情はより一層輝きを増した。

「美味しい…！瑞希意外と料理上手かったんだ…！！」
「意外とってなんだ。」
「瑞希意外と料理…っていうか家事全般完璧にできるんだよ。」
「お前も意外とって言うかよ！」
「へぇ…瑞希“意外と”家事できるんだねぇ…」
「今わざと言ったよな？オムライス取り上げんぞ！？」

そんな“瑞希イジリ”を終えると、俺は純粋な疑問を桃李に投げかけた。

「でも桃李、2年も一人暮らししてたんでしょ？だったら家事できるんじゃないの？」
「んー…でもこんなにおいしくはできなかったなぁ。
料理なんて〝肉は焼くだけ野草はそのまま〟だったからなぁ。」
「ある意味男らしいな…」
「じゃぁ料理は瑞希に全面的に任せるとして…」
「あっ、掃除洗濯ならできるよ！」
「居候する代わりにそれは任せようよ。」
「そうだな。」

ちょうど空になった皿の前で桃李は手を合わせると、言った。

「ごちそうさま！じゃぁさっそく洗濯させていただきます！」

そういうと、持ってきた荷物をがさがさと漁る。

「「？」」

その動作に疑問を持つ俺たち。

「あった！」

それは、俺たちも生では初めて見た――――

「洗濯板！？」

「ちょっ、待て！！お前まさかそれで…」

「え？洗濯と言えば…これでしょ？」

「「んなの初めて見たわ！！」」

「うそ！」

「…俺後で洗濯機の使い方教えとくよ…」

「…頼んだぞ。」

この娘に一般常識を期待した俺たちがバカだった…

未だに洗濯板を抱える桃李を見て痛感した。

「それでさぁ。今更だけど、「賢者と愚者」とかって何？」

洗濯板を鞄に戻した桃李は言った。

「えっ！？ネットはできるのに…っていうかあんな銃でバンバン倒してたのに知らないの！？」

「廉、こいつに常識を期待するな。」

「そうだった…桃李。
まず歴史の話からになっちゃうんだけど…古来人間と鳥獣は共存して生きてきたんだ。
でも数百年前、ヨーロッパ全土にある事件が起きた。鳥獣たちが狂ったように人間を襲う…
「自然共存の崩壊≪ナチュラルロースト≫」と呼ばれる事件。
そこで、人間たちは鳥獣たちを「愚者」、それを討伐する人間を「賢者」と名付けたんだ。
俺たちを含め、賢者たちは「世界賢者機構」に所属して、愚者の討伐依頼を受けて討伐したり、
犯罪を犯した賢者を捕えるんだ。
依頼を受けるかどうかは個人の自由。そのかわり、依頼が達成されたら高額の報奨金が
受け取れるんだ。」

「んー…なんとなくわかった！でも…賢者になるには
世界賢者機構に所属するのが必要なんでしょ？じゃあ…私も所属するべきな？」
「ああ、そうだね。なんなら今登録しとく？」
「登録制なの？」
「桃李、携帯貸して。」

俺は桃李の携帯を受け取ると、ネットに接続してあるＨＰに入った。

「見て桃李。ここが世界賢者機構のＨＰ。
完全紹介制だからこのＵＲＬは検索除けが掛かってるし、登録にも紹介者のＩＤが必要なんだ。
この場合紹介者は俺。俺のＩＤはもう打ち込んだから、あとの項目を入力して？」

そう言って携帯を桃李に返す。
その様子を見て心配ないと思ったのか皿を片付けてキッチンに戻っていく瑞希。

「わかった！」

記入項目は名前、生年月日、電話番号とアドレス、使用武器、拠点地区。
軽快にそれらの項目に文字を入力していたけど、すぐに桃李の手が止まった。

「どうしたの？」
「…私、自分の誕生日知らない…」
「…あ。」

そうだった。桃李は捨て子だったんだ。
年齢はともかく、誕生日は知らなくてもおかしくないだろう。

「今日でいいんじゃねーの？」
「「え？」」

キッチンから突然聞こえた声に、俺たちは間抜けた声を出してしまった。

「だから、誕生日。身分証明書がいらねーんだから、誕生日を何時って書いても
嘘だってバレねーだろ？」
洗い物をしながらそう言う瑞希。

「そうだよ。今日にしよう！桃李の誕生日！」
「…うん！」

桃李は生年月日を入力する。
３月１５日。

「使用武器、銃火器。拠点地区、日本。これでＯＫ？」
「うん。じゃあ入力完了のボタンを押して。」
「ん。」

桃李の携帯に登録完了の画面が表示される。

「よし！これで終わり！」
「簡単だね…」
「まぁなるのはね。
さ、瑞希も洗い物終わったし、本題に入ろう。」

姉と足音

次の日。

「その服装は何とかならねーかなぁ…」

瑞希が怪訝な顔でそう呟いたのは、桃李の服装を見てのことだった。
短い丈の袴姿。
それは外を歩くにはあまりにも目立ちすぎる。（現に昨日屋敷からここに来るまでも目立った。）

「そうかなぁ。でも私和服しか持ってないし…」
「…仕方ねえ。」

瑞希は携帯を手に取り、それを耳に当てた。

「どこにかけるの？」

俺が聞くと、瑞希はそのままの姿勢のまま言った。

「姉さんだよ。」

＊　＊　＊

「瑞希イィィィイッ！！！！」

「はやっ！？」
「おおう！？」

5分後、マンションの玄関を開けたのは黒髪ストレートのロングヘアの美人。
スーツ姿で仕事もできそうだけど、そんな雰囲気は彼女の剣幕で今はかき消されている。

「だ、誰？」
「ああ、瑞希のお姉さん。すごい仕事もできて賢者としても強いんだけど…ブラコンなんだ。」
「ああ…」

ハートを振りまいて瑞希と話す彼女を見て納得する桃李。

「！！」

不意に、彼女は桃李と俺のほうを向いた。

「あなたが桃李ちゃん！？」
「あ、は、はい！」

愛しい弟が自宅マンションに連れてきた同年代の女の子。（この場合俺もいるけど。）
その状況は、桃李をビビらせるには十分な条件だった。
しかし次の瞬間…彼女は桃李に抱きついた。

「…可愛い！ビビってる姿すら可愛いわ桃李ちゃん…！
私は瑞希の姉の花形祐希！よろしくね桃李ちゃん！」

「あ、ありがとうございます…ちょ、あの、ぐるじい…！」
「あら、ごめんなさい。」
祐希さんの胸に顔をうずめられ、窒息しそうだった桃李。（正直、ちょっと羨ましい）
息遣いの荒い桃李の腕を掴んで、祐希さんは言った。
「瑞希、桃李ちゃんの部屋ってあそこ？」
「ああ。」
「よし！じゃあいくわよ桃李ちゃん！しばらく待っててね、瑞希、廉。」
ズルズルと桃李を連れて玄関近くの一室に桃李と持ってきた大きな紙袋を持って、
入っていった。

バタン、と扉を閉める。
中は、だいたい6畳ぐらい。家具は一切なくて、大きなクローゼットだけがやけに目立っていた。
誰も使っていないことは明らかだった。
「ここが桃李ちゃんの部屋よ。家具も揃えないとね…
…話は全部瑞希から聞いたわ、桃李ちゃん。」
「あ…」
「大変だったわね。私もできることがあれば協力するわ！
私のことお姉さんだと思ってくれていいのよ！桃李ちゃん！」
「ありがとう…ございます。」
「いいえ！」

ニコリと綺麗に笑う祐希さんに、思わず安堵の表情を見せる。
「私が来たのは、桃李ちゃんに洋服を持ってくるためなの。
急だったから私のおさがりで悪いけど…ほら！」
バサッと紙袋の中の大量の服を床にぶちまけた。服はもちろん、鞄や靴もある。
「ありがとうございます！」
「お礼なら瑞希に言って。それより、桃李ちゃんに似合いそうなものは…」
素早くこれとこれと、と服を選んでいく祐希さん。
そんな祐希さんに、桃李は再び安心感を覚えた。

＊　＊　＊

「できたわよ！」
「ああ。」
「似合うじゃん。」
祐希さんチョイスの服装は、花柄のシフォンワンピースに黒のニーハイソックス。
彼女の雰囲気によく似合っている。
「よし。じゃあ行こう。姉さんありがとう。」
「いいえ！じゃあ服をクローゼットに片付けたら私も仕事行くわね。

」
「本当に、ありがとうございます！」
「フフッ…頑張りなさいよ、瑞希、廉、桃李ちゃん。」
再び綺麗に微笑む祐希さん。
そんな彼女に見送られながら3人は事件現場に向かった。

＊　＊　＊

「あの夜…なんていうか、巨人の足音みたいな音がして、驚いて窓から外を見たら、
どんどんあの建物が壊れてて…でも大型愚者もいなかったし、
不良の集団みたいにたくさん人もいなかった。
まるで…巨人の幽霊がどんどん建物を踏み潰していくような…」
「…はぁ？」
「ちょ、瑞希！」
近所の子供の証言。
その言葉に悪態をつく瑞希を、俺は急いで止めた。
「と、とにかくありがとうね！」
にこっと桃李が笑顔で言うと、男の子は顔を真っ赤にして去っていった。
「…収穫なしか。」

さっきの証言はカウントしないらしい。
俺たちは再び周囲を周ることにした。

＊　＊　＊

「ん・・・」

廃工場の中の古びたソファで、彼女は目を覚ました。
古い備品しかない廃工場は、ガランとしていて肌寒い。
ゆっくりと身を起こすと、パサリと被っていた帽子が落ちた。

カーキ色の彼女には大き目なキャスケット。天辺には白いポンポンが付いていて、
側面には数字が刺繍されている。

“８”

それは、彼女を“判別”するものであり、彼女の“名前”だった。

その数字が彼女の瞳に映る。

ドクンッ――――

彼女の心臓が大きく波打つ。
そして…彼女は自我を失った。

そばに置いてあった自分より大きな、はるかに彼女より重そうなハンマーを――――

軽々と持ち、簡単に振り下ろした。

＊　＊　＊

ドオォォォォンッ――――

「「「「！！！」」」」

遠くから、大きな衝撃音が聞こえた。
それはまるで、“巨人の足音みたいな”。

「…行こう！」

3人は、その音の方向に走り出した。

捕獲成功

「なっ…なんだよこれ…」

言葉を発したのは俺だけ。
瑞希と桃李は言葉を失ってその光景をただただ見つめるだけだった。

俺たちが来たころには、もう廃工場だった建物は瓦礫の山と化していて。
その空間は土埃を上げてよく見えなかった。

いつの間にか近隣住民はその様子を見て、急いで非難し始める。

「…同じだな。」

瑞希が冷静に分析するように言う。

「…あ！！」
「なんだ！？」

不意に桃李が小さく驚いた声を出した。

「あそこ…人影が見えない？」
「どこ！？」

土埃を目を凝らして見る。
どうやら自然の中で暮らしていた桃李は人一倍視力が良いらしい。
それを理解したのか、瑞希が桃李に言った。

「おい、俺にはわからねえ。どの辺か言え。俺が捕まえる。」

「ん。…あの、真ん中のほうに大きな柱があるの。
そのそばに…ソファ？ベッド？…とにかく何か長方形のフワフワが見える。
そのあたりに…ハンマーを持った小さい人影が…」
「わかった。」

桃李の言葉を最後まで聞かずに、瑞希は土埃の中に入っていった。

＊　＊　＊

「…つっても、この土埃の中じゃ「長方形のフワフワ」なんて見つけられねーよ！」

土埃の中、薄目を開けて進む瑞希。

「…しゃーねぇ。」

右腕の袖を捲る。そこには、何か象形文字のようなものが刻まれている。
瑞希はその刻まれた象形文字に左手をかざした。

ヴォン…！！

その瞬間、まるで「光」を凝縮して出来たような、光の鞭のようなものが現れた。

その光のおかげで、多少は見晴らしがよくなる。

「…いた。」

辺りを見回せば、ようやく人型の影を見つけることができた。

瑞希は手に持っていたその光の鞭を振る。

鞭はまるで瑞希の手足のように自在に、瑞希の思うままの軌道を描き、

影の主を捕えた。

「…あっ！」

その瞬間、小さな、甲高い声が聞こえた。

「…女？」

少しずつ、光に従い影に近づく瑞希。

「〜〜〜！」

鞭を伝って抵抗されているのがわかる。
それも、かなり激しく。
その力は、明らかにさっきの甲高い声から想像できる女の子の力を超越している。

「…まじかよ？」

影の主の姿をようやく捉えた瑞希は、その姿に思わず声を漏らした。

＊　＊　＊

「遅いね瑞希…」

隣の桃李がぼそりと言った。

「…瑞希には悪いけど、土埃払っちゃおうか。」

俺には一つ策があった。

「え？出来るならやった方が良くない？」

何が悪いの？という表情の桃李。

「…ま、いっか。」

瑞希ごめん、家屋破壊の犯人を捕まえるために…「巻き添え」になってくれ。

俺は鞄から短刀を４本取り出し、その４本に力を込める。

そして、その４本を――――思いっきり、土埃の空間の上空４隅に投げた。

昔から使っている俺の武器は、俺の思った場所へ的確に飛ぶ。

「よし！」

全てが狙いの位置に並ぶと、その場所だけは無重力空間になったように、プカプカと浮いている。

「えっ？剣が浮いてる…！？」

初めて見る俺の能力に、驚いている桃李。

「…水撒！」

短刀に囲まれた四角形に…雨が降る。

「…すごい…雨が降ってる…」

「これで土埃は消えるでしょ。ただ…」

「おいてめぇ廉！！！！
勝手に俺の上に雨降らすな！見ろよ雨と土埃でドロッドロじゃねぇか！！」

すぐに現れた瑞希は、水を含んだ土埃でまさに泥まみれになっていた。

「ほらね、こうなるからちょっと躊躇ってたんだ。」
「ああ…ドンマイ瑞希☆」
「ドンマイじゃねえ！」
「で、捕まえた？」
「俺はお構い無しかよ…捕まえたよホラ…ってああ！！」

光の鞭を辿り見る瑞希が、先を見て奇声を上げた。

俺たちも光を見るが、その先には何も生物は見えない。
ただ、鞭の先が引きちぎられたようにボロボロになっている。

「な…俺の光鞭を引きちぎるなんてどんな力なんだよ…」

「どんな奴だったの？」

鞭を見て絶句する瑞希に、桃李は尋ねた。

「それが…変な作業着着て、それと同じ素材の帽子被った……女。」
「「…女！？」」
「俺も信じられねーよ。でも確かに、女だった。」

「あの……」

「そう、こんな声の…」

不意に背後から聞こえたか細い声に振り向く。

背後にいたのは。

カーキの作業着とそれと同素材の帽子を被った。

小柄で、か弱そうな。

でも、たしかに後ろに回された手には彼女より大きなハンマーが握られていて。

腰には瑞希の光鞭が今もなおキツく巻きついていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8516x/

夢物語≪ドリームワールド≫

2012年1月6日13時45分発行